

平成12年 1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

暖冬と暖地性蝶類の北上

「暖冬異変」という言葉も近頃耳にしなくなった。暖冬が毎年続くともはや異変ではなく、暖冬が当たり前になってきた。CO₂の増加による温室効果とも言われている。

昨年9月、小曾木でクロコノマチョウというジャノメチョウ科の蝶が1頭採集された。青梅市では初記録である。クロコノマチョウという蝶は、元々暖かい地方の蝶で、1970年代までは国内の分布圏は本州の東海地方以南から屋久島までとされていた。東京都でも飛来した蝶が採集された例はあるが、1979年以前のその数は3例にすぎない。

ところが、1980年代に入ると、この蝶は東は静岡県から神奈川県へ、北は富士川沿いに山梨県南部へと分布域を広げ始めた。この蝶の固体群が寒さに対する耐性を獲得したということもあるかもしれないが、何といても冬が寒くなくなってきたことの影響が大きい。

クロコノマチョウは、ススキやジュズダマイのイネ科の植物を食べ、年2～3回発生し、成虫で越冬する。食草となるススキなどのイネ科の植物はもっと北の方まで分布しているが、元来暖かい地方の蝶だから、寒い地方では成虫が冬を越して春まで生き残ることができない。

いわば、冬の気温がこの蝶の分布圏の北限を規定していたといえる。分布の境界近くでは昔から境界を飛び超えて北へ移動する個体がいたであろう。しかし、冬には死に絶えて子孫を残すことができず、太平洋側では静岡県が分布の北限となっていた。

1980年代に入り暖冬の年が続くようになると、クロコノマチョウが成虫で冬を越すことのできる境界が北上し北進を始める。山梨県南部の富士川流域では頻繁に見られるようになり、東京都でもぽつぽつとこの蝶の記録が増えてきて、1980年代には10例近くの記録が報告されている。そして、とうとう青梅市にまで姿を現すようになったわけだ。青梅市で採集された個体は、神奈川県か山梨県から更に北へ分布を拡張しようと飛んで来た固体だろうと推定され、まだ青梅市で冬を越せる状態ではないだろうが、最近の分布の北上のスピードからすると、今後この蝶を見かける機会も増え、冬の暖かさのいかんによっては、越冬し世代を繰り返すこともあるかもしれない。

モンキアゲハというアゲハチョウ科の蝶は、今こそ市内でもしばしば見かけるが、暖地性の種で青梅市では昔は珍しかった。分布を拡大しながら青梅に定着するに至った蝶である。

クロコノマチョウも近い将来このようになるかもしれない。更に、クロコノマチョウの後を追って、ツマグロヒョウモンという暖地性のヒョウモンチョウが北上を続けている。山梨県南部では発生を繰り返し、既に越冬もできているかもしれない。この蝶近々青梅市まで飛んで来るかもしれない。気候が変われば減る蝶もいれば増える蝶もいる。分布の境界付近では気候変動に伴う蝶たちの栄枯盛衰のドラマが繰り返されている。

(文責 久保田)